

タイトル:平成 27(2015)年度 教育セミナー(第 11 回)

日時:平成 27 年 9 月 21 日(月・祝)～24 日(木)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「オスマン帝国におけるクリミア及び北コーカサス難民の救済

— 難民委員会による義捐金・物資の募集と帝国臣民の動員(1860-65 年)」

成地 草太 (明治大学大学院文学研究科史学専攻アジア史専修)

今回、中東☆イスラーム教育セミナーに受講生・発表者として参加させていただき、多くのことを学ぶことができた。イスラーム教育セミナーの最大の利点は、自分の専門分野以外の先生や学生から学ぶことができる点にある。今年度のセミナーは、文化人類学、地域研究、文学などの学問分野から中東・イスラーム諸地域の現代の問題を扱う受講生が大半を占めており、全体として「アラブの春」や ISIL などといった現代の中東情勢に対する問題意識の高まりが反映されていたように思う。それゆえに、歴史学、特にオスマン史・トルコ史を専門にしてきた私にとって、狭い自分の視野を広げることのできる絶好の機会であった。多様な地域や学問分野の発表を通して、私は、自身の分野である歴史学を改めて意識することができた。それとともに、他の分野の研究手法や概念を援用しながら、新しい問題提起をしていく必要性についても考えさせられた。

こうした中で、私も発表する機会にも恵まれた。今回は、クリミア戦争後のクリミアと北コーカサスにおいて発生したムスリム難民の大量移住に対するオスマン帝国の対応をテーマとして、救援、特に帝国臣民による義捐金や物資の拠出の動きの一端について明らかにすることに努めた。しかし、一番手であったためか、緊張をしまい、自分の思うような発表にはならなかった。また、扱う専門も地域も異なる人々の前での発表であることは重々承知していたつもりではあったが、この点もなかなかクリアするには至らなかったと認識している。それにも拘わらず、受講生の皆さまからは多くの率直なコメントと質問をいただき、自身が見過ごしてきた問題点について指摘をいただくことができた。さらに、書籍や論文の中でしかお目にかかったことのない先生方に対して、自身の研究について発表し、セミナー中やその後の懇親会等でコメントやアドバイスをいただけたこと、また自分の解決できないでいた疑問や考えについて議論していただけたことは大変貴重で、意義深いものであった。特に、オスマン史研究の先達でおられる高松洋一先生にレジュメ中のオスマン・トルコ語史料の転写や翻訳の間違いについて丁寧に指摘していただけたことは、私の史料へのむかい方の甘さを痛感させてくれた。自身を戒め、これまでの研究を見直す機会をいただけたように思う。

私は、今回のセミナーを通して、多くの課題をみつけることができただけでなく、終わりのない研究を続ける勇気をいただくことができたように思う。これを起点として、さらなる精進を重ねていきたい。

末筆になりますが、こうした貴重な機会を提供してくださったスタッフの先生方、そして、事務連絡や発表の段取り等でお世話になりご迷惑をおかけしました事務局の千葉さまに、心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。